

国立女性教育会館理事長

内海房子

×

最高裁判所判事

鬼丸かおる



女性のキャリアアップのためには、また、女性が働きやすい社会となるにはどうしたらよいのか。子育てをしながらキャリアを重ねてきたお二人に、ご自身の経験をふまえながら語り合っていました。

はじめに

鬼丸 本日は、最高裁判所にお越しいただきまして、ありがとうございます。よろしくお願ひいたします。

内海 こちらこそ、よろしくお願ひいたします。

鬼丸 内海さんは、もともと民間企業で働いていたとお聞きしています。現在のお仕事とあまり繋がらない気もしますが、今のポストに就かれたきっかけについて教えてください。

内海 私は、NECに40年間勤めていました。本体に30年、グループ会社に10年で、その最後の仕事として、NECラーニングの社長を務めていたときに、内閣府の男女共同参画会議の委員をしていました。

そこで、当時、内閣府男女共同参画局長だった板東久美子さんと知り合い、板東さ

対談

「女性が活躍する

んから国立女性教育会館（※1）の理事長のお仕事をやっていただけませんかとお話がありました。

鬼丸 そうなんですね。私は、平成25年2月に最高裁判所の判事に就任しましたが、その前は38年間弁護士として働いていました。町医者的というか、万能屋というか、何でもやっている庶民派の弁護士でした。

※1 成人女性のための社会教育施設として設立された独立行政法人。女性教育指導者及び女性教育関係者に対する研修、女性教育に関する専門的な調査及び研究等を行うことにより、女性教育の振興を図り、もって男女共同参画社会の形成の促進に資することを目的としている。

キャリアのスタート

鬼丸 大学では、数学科のご出身、いわゆるリケジョでいらっしゃいましたよね。

内海 はい。数学科に進み、将来は学校の先生



社会を目指して」

になろうと思っていました。当時は企業に就職するにも女性に対する求人がなく、学校の先生になる人が多かったので。でも、大学2年生の時にコンピュータと出会ってから、進路変更を考えました。

鬼丸 コンピュータは将来性があるとお考えになったからですか。

内海 いえ、そんなことは全然考えていなくて。初めてコンピュータに出会って、こんな面白いものが世の中にあったのかと衝撃を受けたんです。それがきっかけでコンピュータを扱う会社に入ろうと思いました。NECに入ったのも、最初はコンピュータのソフトウェア開発者として入りました。

鬼丸さんは、どのようにお考えになって、司法の道に進まれたのですか。

鬼丸 私は少しませた子でして。小学校低学年の頃、漢字を習っているときに、男女、夫

婦、父母と全部男が前になっていることに気付いて、どうして女男、婦夫などと言わないのか疑問を感じていました。

また、女性は結婚・出産して主婦業に専念する人がほとんどで、やりたい仕事はできないのかなと気になっていました。そこで小学校5年生の頃から、自分は働いて自立したいと思いました。

どうすれば働き続けられるんだろうと考えたときに、会社に入ると男女の差などがありそうだし、男性と肩を並べて働くには資格が必要だと考えました。そこで、司法の道に進むことにしました。

当時を思い返すと、ロールモデルがなく、とにかく働けるところに行かざるを得なかったですね。

内海 そうですね。私も働きたいとは思っていましたが、一般企業で長く勤める女性が、その当時はあまりいませんでしたので、何とか自分で切り開いていかなきゃいけないという自覚はありました。

鬼丸 そのような環境のなか、働き続けるというモチベーションはどこにあったのでしょうか。

内海 まずは仕事が面白かったというのがあります。あと、会社を選ぶとき、仕事を続けられる環境にこだわりました。実家の近くの会社を選べば、両親の手助けが得られるだろうと思い、会社を探しました。

キャリアアップの壁

鬼丸 NECでは、順調にキャリアアップをされていったのでしょうか。

内海 いえいえ、そんなにキャリアアップはしなかったんですよ。入社してから12年経った頃、やっと最初の役職である主任になることができましたし、昇進時期も同期の男性と同じではなかったです。



内海 房子 (うつみ ふさこ)

国立女性教育会館理事長。

日本電気株式会社（NEC）入社後，ソフトウェア開発に関わり，人事課長，研究開発事務本部長等を歴任して，平成17年にNECラーニング株式会社社長に就任。平成23年7月から現職。

また，ある資格選考では，女性というだけで，男性はしていないような人事担当者との面談をしなければならなくて。

鬼丸 女性だけにですか，それは。

内海 女性だけです。そのとき，府中の事業場にいたのですが，工場まで人事部の担当者が来ました。直属の上司から，自分がしている仕事を説明すればいいと言われたので，一生懸命，仕様書や取扱説明書について説明をしたところ，その方は技術的なことはよく分からないからもう結構ですって言われて，そそくさと帰って行きました。結果的に，昇格することはできましたが，今となってみると驚くようなエピソードが色々ありますよね。

鬼丸 そうですね，たしかにハードルはあったと思います。私は司法試験に合格する前に，国家公務員試験に合格しました。官庁訪問に行くと，男性については人事課長面接で採否が決まりましたが，私については「女だから，自分では決められない」と言われ，局長面接となりました。

学生時代を終えて社会に出ようとした時に，初めて自身で体験的に味わった男女の別扱いだったので，衝撃を受けました。昭和40，50年はそんな時代でした。

内海 そうですね。

鬼丸 結婚して子供が生まれたりすると，そちらも大変になり，なかなかキャリアアップすることは女性自身にためらいがあると思うのですが，そういうことはありませんでしたか。

内海 これを言うと，それじゃあできたはずねって言われてしまうのですが，かなり恵まれた環境でした。自宅の近くにそういうコンピュータメーカーがあったということ，両親も元気で，子供が生まれたり快く手伝ってくれました。でもちょっと弁解させていただくと，そういう環境は折り込み済みで，私が周りを固めていったと。

鬼丸 ご自身で環境づくりを考えて，就職したということですね。

幸い，現在，裁判官には，男女の差別のようなものはないのです。女性だから転勤させないとか，ポストに就かせないということは見かけません。最近は司法試験合格者に占める女性の割合よりも多い割合で女性が裁判官に任官しています（※2）。

裁判は力仕事ではなく腕力はいりませんから，そういう意味では，女性も裁判官になりやすいのです。最高裁の裁判官15人のうち3人は女性ですし。

鬼丸 かおる (おにまる かおる)

最高裁判所判事。

昭和50年弁護士登録。その後、司法研修所民事弁護教官，日弁連両性の平等に関する委員会委員，東京弁護士会高齢者・障害者の権利に関する特別委員会委員長等を歴任し，平成25年2月から現職。



※2 平成28年12月に司法修習を終えた第69期司法修習生(1762人。うち女性371人)のうち，平成29年1月に判事補に任官した者は78人(うち女性30人)。平成29年12月に司法修習を終えた第70期司法修習生(1563人。うち女性359人)のうち，平成30年1月に判事補に任官した者は65人(うち女性18人)である。

男女の役割分担意識

鬼丸 最近は大分変わってきたと思いますが，日本社会には，男女の役割分担意識といいますか，そのような固定観念が根強く残っているという印象があります。

内海 意外と，男性だけではなく女性にも根強く残っていますね。妻である私が，母である私がやらなくてはと思う人がまだまだ多いと思います。

鬼丸 女性もさることながら，男性の意識も変化しないとなかなか社会全体で変化していかないと思います。

内海 本当に難しいですよ。教育や家庭環境とか，いろんな影響があると思うのですが，小中高から大学に入るまでの環境が大きく影響していると思います。

日本は，小中高の在学率においては男女平等なのですが，大学になるとその比率が変わってしまいます。

4年制大学で見ると，女子が45パー

セント，男子が55パーセントと差があり，国立大学だけ見ると，女性の割合は約30%なんですね。

理系に進む女子については，工学部は10パーセントぐらいしかいませんし，理学部は20パーセントを超えて，徐々に多くなってきてはいますけれども，いずれにしても男女の差が非常に大きい。

大学を選ぼうとした時に，もう女の子はそんな頑張らなくてもいいとか，理系は男の子の分野よねというような，せっかく力があって伸びる子が，そういう育てられ方をしているのかなという印象があります。

どう考えても，小中高の時の男女平等度と比べると大きく違ってきており，これが経済界に少なからず波及し，若い方が社会に出るときにも影響が及んでいるのではないかと思います。

鬼丸 女性は，ちょっと仕事に就いてみて，結構大変だったら家庭に入ることもできる。だから，女の子は最終的にはうまく結婚をすればいいからみたいところが，まだ雰囲気的には残っているのかもしれないね。

内海 それが今の高等教育の男女平等度に表れている。大学が悪いわけではなくて，それ

までの育てられ方がそうになっているのかなと思うんです。だから高校を卒業した18歳で差が出てくる。これが、日本に性別役割分担意識が根強く残っている証拠ではないかと思っています。

今は大分変わりましたが、実際のところ、子供の世話はお母さんっていうふうにみんなが思っているのではないかと。アンコンシャス・バイアス（※3）とよくいいますけど、

無意識のうちにそういう偏見を持っている気がします。

鬼丸 妊娠出産は、どうしても男性に代わってもらうことはできない。

これを発端に差別が広がっていったのが、今までの男女差のある社会であると思われる。

要するに、女性は妊娠して出産して育児があり、そして家事もやるから、どの女性にも大きな仕事は任せられないという認識がある気がします。

内海 それを統計的差別というんです。統計上はそういう人が多いので、差別して大事な仕事を任せず、その後もやりがいのある仕事が与えられないので、結局、辞めてしまう。

ただ、最近では、その統計的差別をなくそうという動きもあります。女性も男性と同じように、長期的な育成計画を立てて、この人は次は係長とか、主任とか、そういうちゃんと先を見据えた育成をやりましようとなってきている。

鬼丸 そのように導くことも今のお仕事なのですか。

内海 もちろん、そういうお話や研修もします。



※3 「無意識の偏見」と邦訳される概念。自分の育った環境や経験に基づき、気付かないうちに持つようになった物事への見方や考え方を意味する。

ただ、男女共同参画の考え方が世の中に広まっていくための意識改革というか、世の中の皆さんの意識を変えていくというのは、なかなか難しいところなんですよ。

鬼丸 私は子供3人には、男の子だからとか、女の子だからということは言いませんでした。そのようなことは絶対に言うまいと思っていました。

内海 それは、素晴らしいですね。

鬼丸 私を見てきたからということもあるのでしょうけど、子供は、女性が働くのは当たり前だと思ってくれました。

子供は3人とも保育園に通いましたが、保育園を利用する家庭は、皆母親も働いていたので、母親が働くことに対する違和感は無かったようです。

小学校に通うようになってから、友達の家はただいまって帰ると、玄関を開けてくれておやつを出してくれるのに、自分の家は鍵がかかっていると文句を言われるようなことはありました。それでも、私が仕事をすることに、子供はそれなりに理解を示してくれました。子供に恵まれていたのかもしれません。

男性の育児参加

鬼丸 妊娠出産は男性に代わってもらうことができなくても、育児家事については、男性は主体的に行えますし、そういう意識をこれから持たなければいけないと思います。

内海 そうですね。そもそも、男性も仕事や通勤で育児の機会を取り上げられて、かわいそうと思います。

鬼丸 私もそう思います。子供を育てることによって、自分も成長し、いろいろな気付きがある。そういう豊かな生活ができるのは、ほんの短い間なのに、もったいない気がします。

大変なこと、思うようにならないことはたくさんあるけれども、子供がいろいろ吸収して、育っていくのは無上の喜びです。お父さんがそういうときに関わらないのは、とても残念で、もったいないですね。

たしかに、子供を育てる苦労はたくさんあります。でも、不思議と苦労したことより、楽しかったことの方がよく覚えています。

内海 本当にそう思います。大変だったという記憶はあるのですが、今、思い出すことは、楽しかったことばかり。

鬼丸 弁護士時代には、朝4時半に起きて、自分が出かける9時までの間に、朝食を作りながら準備書面（※4）を書いて、子供を起こして、送り出してまた書くような生活をしていました。

※4 民事訴訟において、当事者が口頭弁論で陳述しようとする事項を記載し、あらかじめ裁判所に提出する書面。

内海 でも何か達成感というか、やったぞみたいな感じがありま

すよね。

鬼丸 それはありますね。若いからできたというのがありますが、時間の使い方について常に考えていましたし、ものすごく集中していたと思います。

事務所と裁判所との間の移動時間に、書かなければいけない書面とか、今日やるべきことの計画を、全部頭の中で組み立てて、事務所や裁判所に着くと、すぐ取りかかれるようにしていました。時間を効率的に使うことには、必死でしたね。

内海 育児休業を取得した後、職場復帰した方は、帰る時間が決まっているのでスケジュールを確認し、自分のやることをきちんと管理している印象がありますね。

プログラムを開発するときは必ず実機で確認しないと出荷はできませんが、昔はコンピュータは本当に貴重で、1時間、2時間単位でしか実機を貸してもらえなかった。その限られた時間で何をするかということについては、男性でももちろんそういう方もいらっしゃると思いますが、女性のほうがずっと計画的でしたね。



環境の大切さ

内海 裁判所の採用パンフレットなど資料を読ませていただきましたが（※5）、妻が1年間育児休業を取って、復帰した後は夫が取っていると書いている人もいて、裁判所はすごく進んでいるんだなと思いました。

※5 裁判所職員の採用情報は裁判所ウェブサイト (<http://www.courts.go.jp/>) や裁判所用 Facebook (<https://www.facebook.com/saibansho.saiyo/>) に掲載されています。

民間企業においても、アメリカやヨーロッパの会社に出向した人は、現地の社員が定時に帰るので、そのときはちゃんと定時に帰るといのですが、日本に帰ってきた途端に、また元に戻ってしまう。

鬼丸 やっぱり意識の問題ですね。それと社会が定時の帰宅を容認するというのも大きい。

内海 そうですよ。民間企業でも、会社によりますね。トップの社長がイクボスだったり、イクメンだったりすれば、その会社の雰囲気が全然違いますし。

鬼丸 トップが率先して言ってくれれば、随分違うなと思いますね。自分が育児の辛いこと、楽しいことの両方を経験してみて、君たちもやってみたらって、一言言ってくれれば、本当は育児をしたいと思っている人も言いやすいですしね。

むしろ、社長がやっているなら、自分もやってみるかという人も出るでしょうしね。実際に女性が重要なポストに就いてみると、案外、周りの男性も意識が変わってくるかもしれない。

内海 おっしゃるとおりだと思います。ドイツの小学校の女の子たちは、男の子でも首相になれるのって聞くんだそうですよ。

鬼丸 強い首相がいらっしゃるから。

内海 小学生ぐらいだと、生まれた頃から首相はずっとメルケルさん（※6）で、女性の首相しか知らないわけですよ。だから、男の子も首相になれるのって質問が出るのも、環境がそうさせているというか、抱くイメージというのは本当に大事なのかなと思います。

※6 第8代ドイツ連邦共和国首相（2005年11月～）。ドイツにおいて、女性としては初の首相に就任した。



子育てについて

鬼丸 子育ては、一家庭の問題だけではなく、将来の社会の担い手を育てるという大事なものです。男性も子育てに関わるべきだし、社会がなるべくたくさん関わって、社会性のある子供を育てる方法をもっと考えるべきだと思います。みんなが関わっていけば、多様な価値観を理解する子に育っていくのではないかと考えるのですが、その実践方法は具体的に思いつきません。

内海 たしかに、それは難しいですね。

鬼丸 具体策は思い付かないのですが、家の中で、この子を進学率の高い学校に入れて、大会社に就職させるというだけで育ててしまうと、その子も、成績や大学名、会社名だけで判断するという偏った考え方になってしまう可能性が高いですね。もっと価値観がいっぱいあることを知らせるように育てていくことが望ましいとは思いますが。



内海 そうですね。だから、女性がもっと働きに出られるためにという観点から、仕事だけやっていたお父さんも家のこともやるという相互乗り入れが必要という語られ方をしていますが、鬼丸さんがおっしゃったように、子供のためにという視点から、両親が子育てに関わることがいかに子供の将来とか、子供の育ちに良い影響を与えるかっていうことも、もっと議論してほしいと思います。

働く女性へのメッセージ

鬼丸 最後に、若い方に向けてメッセージをお願いします。

内海 今のお仕事もちろん、とてもやりがいのある良い仕事にたどり着いて、すごく幸せに思っています。それまでも約40年間、NEC関連の会社で働いてきました。

先ほど、子育てで辛いこともあったはずなのに、楽しいことしか思い出せないとお話ししたのと同じように、仕事でも辛いことはたくさんあったと思いますが、今振り返ってみると、仕事を持つということ、働くということが楽しかった。いろんな人と知り合いになって、自分の人生を豊かにしてくれた。

このように感じられるのは、ずっと仕事を持ち続けてきたからだと思うんですね。だから、是非、若い人たちにも自分がやりたい、これが私の天職だと思える仕事を見つけて、長く全うしていただきたいなと思います。

よく、仕事と子育て、二者択一みたいな言い方をされますが、そんなことは絶対ではないと思います。どちらも当たり前のことなので、子育ても楽しみながら、仕事も楽しんでほしい。そういう仕事をまず見つけてほしいですね。

鬼丸 本当にそうですよね。本日は、楽しいお話をありがとうございました。

内海 こちらこそ、ありがとうございました。

(対談日：平成30年1月15日)